

勝林寺寺報
素晴らしいひいばあちゃん

わたしの家には98歳のヒイバアチャンがいます。

耳は少々遠いけれど毎日毛糸の編み物なんかをして、風邪ひとつひいたことなしの元気ばあちゃんです。

このひいばあちゃんのおかげで、おじいちゃんたちの畠仕事、父母もお勤めなんか安心してできるのです。

「ひいばあちゃん、ありがとうございます」なんて、時折言つてあげると、とってもよろこんでくれます。嬉しそうによろこんで、それからよく昔のはなしをしてくれます。

いつか私が、中学校で習つた「竹田の子守歌」を歌つてあげたら、それがお気に入りで、「あんなんとかの子守歌聞かせてくれえや」といいます。

ひいばあちゃんも小さいとき遠くの町へ子守奉公にだされたのだそうです。

守りもいやがる／盆から先にや／雪もちらつくし／子も泣くし

草履ばきで子供背負うて夕方おそくまでの子守奉公は辛かつたそうです。

はよも行きたや／この在所こえて／向こうに見えるは親のうち／向こうに見えるは親のうち

節季の敷入りが待たれて待たれて、「向こうに見えるは親のうち」。

「帰れる親のうちがあればこそ辛抱じゃつた」

ひいばあちゃんは毎回毎回おんじことをいつてそれからなぜかお念佛唱えて、「ナンマンダブ！」言うててしまうのです。

なんでもそこで「ナンマンダブ」のかわたにはようわかりませんが、ただどうも、あのときの辛さを思い出してその辛さを噛みしめながら言つているのではなさそうです。どこのか不思議と「明るさ」が響いているように思います。ナンマンダブ言つて、編み物の手が何か弾んでいくようにも見えるのです。

「なんでひいばあちゃん、あそこでナンマンダブばかり言うのやろう」次のおばあちゃんに聞いてみたことがあります。

「ヒイバアチャン、今でも〈向こうに見えるは親のうち〉をみて、それで生きてはるのと違うか。それで毎日が明るいのと違うか。それでナンマンダブよろこんでいやはるのやろ」

「竹田の子守唄」ヒイバアチャン好きなわけが、なんかおぼろげながらわかったような気がして、それからも時々わたし唄つて聞かしてあげるのです。

「暑さ寒さも彼岸まで」

暗く冷たい冬から、猫柳・蕗の薹が芽吹き、こぶしの花が咲き、梅・桃・桜・花橘の香り漂う春となります。この季節の転換が彼岸です。

これを機に、「いのちの転換」を考えようと設定されているのが「彼岸会」という法座です。

「もの」と「ものにとらわれた」比較・对立・競争の苦惱の世界を抜け出して、あたたかな陽光のもと、それぞれのものが輝いて共に生死できる世界への転換。

「後生浄土」を願おう

「往生浄土」を願おう

祖師たちはそう教えてくださいます。

お参りください。

三月一十一一日 午後2時

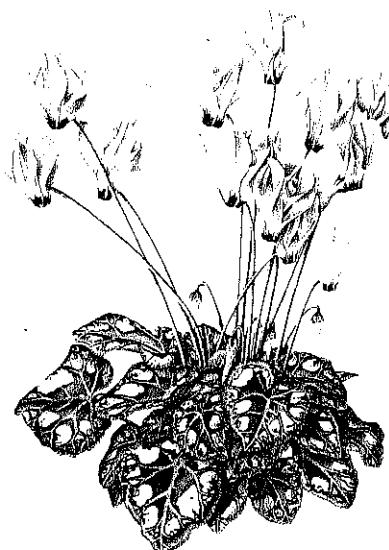
法要終了後合図役員会

念佛奉仕団、研修旅行
御同朋結集大会のこと

の協議です

人と見わけ穴二つ

三月のことみ



春の彼岸会（はるのひがんえ）

「暑さ寒さも彼岸まで」

暗く冷たい冬から、猫柳・蕗の薹が芽吹き、こぶしの花が咲き、梅・桃・桜・花橘の香り漂う春となります。この季節の転換が彼岸です。

一月	兵庫教区テレホン法話開設者交流会
二月	仏教社会福祉研究会（京都）
三月	同じ
四月	はこべの家ボランティア（以下月・水・木）
五月	デーサービスセンター（以下火・金）
六月	龜井孝氏宅法事
七月	幼PTA作業
八月	アニメ大会
九月	中島利一氏宅法事
十月	初午（→十七日）
十一月	幼PTA十六夜会
十二月	数森好章氏宅法事
一月	宮嶋盛義氏宅法事
二月	西池希里卒園式
三月	森戸康雄氏宅法事
四月	大月忠雄様忌明法事
五月	春の彼岸会
六月	合同役員会
七月	西陣長円寺彼岸会法座
八月	幼PTA
九月	田中和子氏宅法事
十月	坂本智氏宅法事

二月	教区基幹運動組長相談員研修会
三月	教区基幹運動推進委員会総会
四月	大月忠雄様忌明法事
五月	みのりを聞く会

やり直しのきかぬ
人生であるが
見直すことはできる



さよならみなさん
十日目十日目に変わるテレホン法話を必ず
聞かせて頂いております。

まあなんて似たようなことがあるもんだと
前回2月10日のお話しを聞いて驚いてし
ました。

もう二十三年もまことに亡くなつたこの家の
祖母のことです」とさいます。

わたしはこここの家に来る前からの教員生活
で、特にこの祖母には子育て一切お任せで、
ご苦労のかげっぱなしで、終に祖母孝行の一
つも出来なかつたことを申し訳なく思つばか
りでござります。

「ひいばあちゃんのご恩は忘れんように」
と子供たちに折々言ひ聞かせるのが関の山で
その元気な元気な祖母が、夏風邪で、三日
の入院で亡くなるとき、お見舞いに集まつた
私たちに手を合わせて、「さよなら皆さんチ
ユッチユクチュ」といって、それでもう目を
つむつて「ナンマンダブ、ナンマンダブ」と
口のなかでいいながら静かに静かに息引き取
りました。

「お淨土に行かはつたんや」と看病につい
ていた母が言いました。だれも「本当にそう
やそうや」と思つたんです。

祖母のご臨終はなんの変わりもないいつも
のとおり、元氣で働いていた日のとおりであ
りました。朝晩お仏壇にお参りして、せつせ
せつせとお寺参りに励んでいたいつもの通り
通り逝つてしまわれたのです。

それに祖母は明治の人でしたから、あの古
い唄のなかで孫の子育てをしてくださつたの
です。子育てのなかで祖母の得意な唄。
「雀」の唄でありました。

問答のかたちになつています。

「雀雀 今日もまた 暗い道を ただ一
人 林の奥の 竹やぶの 淋しいおうち
へ帰るのか」
その問い合わせに対しても雀は答えます
「いいえ 皆さん あそこには とおさんか
あさん 待つていて 楽しいおうちが あり
まする さよならみなさん チュッチュクチ

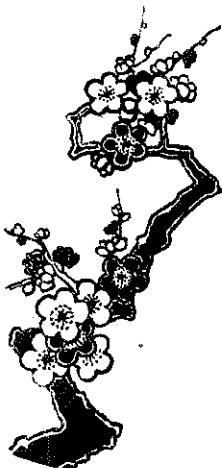
ユ
祖母には、元気だったころから、ずっと昔
から、帰るところが見えていたのです。

帰るところが見えているなかで私の子供た
ちも育てて頂いたのです。子供たちもその
ことを今も心の中で頂いているようです。ひ
い婆ちゃんご命日には兄弟そろつてお仏壇で
お正信偈をあげておりますから。

「さよなら 皆さん チュッチュクチュ」

亡くなつてから私、学校の図書室で、この
「雀」という唄について調べて見ました。そ
してびっくりしました。さすが明治と。
作詞は明治を代表する歌人「佐々木信綱」
でした。

その人の作った唄が雑誌に出でいたのをみ
て感動し曲をつけたのが彼の有名な「滝簾
太郎」。「荒城の月」の作曲者だったのです
。明治は遠くなつて仕舞つた今、しかしあた
は、祖母を通して「昔を今に」実感するこ
とができるのです。



中島	信市	さよま
一月三十日	坪口	
二月十二日	栗尾	

大月 忠男 さよま
六十六歳

小さい
雪と雪は
よく積もる
ささやかな声が
世界を動かす



日からうろこが

この歳になつてなんとも恥ずかしいことで
すが、初めて宗教というものへ目をひらかせ
ていただきました。

わたしはもう二十過ぎから実家を飛び出し
て、ただもう商売一筋に我武者羅に生きて参
りました。その間、宗教的な縁が幾度かあつ
たはずですが、この世を生きるのに精一杯で
ありまして、宗教なんかとむしろ軽蔑して避
けてきました。

「宗教なんか生きるために余計な邪魔も
の」と思つておりました。田舎には神棚も仏壇もありません。
生きるために金儲けだけがわたしの生活全体
であります。今日の今までそういう生き方で
ありました。

そこでその若いお坊さんたのんで毎月仏
教の話を聞く会をしてもらうことにしてくだ
さいました。

そのお坊さん、「わたしも一緒に学ばせて
いただきましょう」と、かえつて感謝されて
仕舞い、恐縮至極であります。

まず、宗教というものは、人事ではない。
自分自身のことや。自分自身のいのちの問題
やというのです。だから、今日のお通夜も、
死んだ人の供養や、遺族を慰めるためのもの
ではなくて、亡くなつたこの人を縁に、さ
て我が身はと考えさせていただくこととわた
しは思うというのです。

つね日ごろは、金儲け・人目体裁ばかりで
生きている私だが、

「さてそのわたしの命は」と考えてみると、
いつのまにやらわたしもこんな歳になつてい
る。この私が、これから的人生、なにをより
所に生きていくのか。またここで死んだらそ
れでおしまいなのだろうか。
なんにも分かっていない。はなしを聞きな
がらわたしゾオーと悪寒がしてきたのであ
ります。

この不況のなかでわたしの店は先ず堅
い歩みを続けています。家庭だってこれと言
ふ落ち度はありません。これで大丈夫、これ
で安心と思つてきたが、いつのまにかこの歳
になつたいま、ほんとうに安心立命できてい
るのか。

安泰な経済生活、無難な家庭生活。しかし
その裏にいつしか忍びよる命の不安をどうし
たらいいのか。考えれば考えるほど懲然と
いたしました。

法話のあと、「ご文章」というのがありました。

若いころいつかどこかで聞いたこともあり
ましたが、こんど法話のあとに読まれた『白
骨の文書』は、身に凍みこころに食い込む
ように私はさきとれました。

そこでその若いお坊さんたのんで毎月仏
教の話を聞く会をしてもらうことにしてくだ
さいました。

そのお坊さん、「わたしも一緒に学ばせて
いただきましょう」と、かえつて感謝されて
仕舞い、恐縮至極であります。

ところが、この間、私の無二の商売親友が
突然死んで、そのお通夜のときであります。
田舎から出張してきたと言う若いお坊さん
が、読経のあとお通夜のための法話をなさつ
ります。

それで私、日からうろこの落ちた思いであ
ります。

